湖西の古絵図

――湖岸地形の変化を見る――

はじめに

古絵図は、古代から近世に至るまで、村や山の境界、城や社寺の様子などを示す唯一の手段でした。しかもそれは、それぞれの時代の政治、生活、あるいは信仰にとっての重要問題に、直接関係して作られたものが大部分であると言えます。それゆえに、古絵図は昔の様子を伝える貴重な文化財です。

安曇川文化芸術会館では、昭和56年3月に湖西の文化財シリーズの第1回として、「特別展湖西の古絵図」を開いたのですが、その際に調査展示した荘園絵図、村絵図、境界相論絵図などのなかから、水没など湖岸地形の変化について残っている言い伝えなどに関係があり、絵図としても特色のある4点を取り上げて見てみることとします。

1．比叡新荘絵図　34.4cm×59.3cm

この絵図は、作製年代も作製目的も全くわかりませんが、右隅に「寛平四(892)年勅許」とありますから、恐らく平安時代前期頃の様子を画いたものであることは確かであると思います。画かれている領境は、比叡本荘と比叡新荘の両荘の領域（高島郡誌）で、点線で境界が記されています。この両荘の境界には問題があったようですので、「勅許」とあるところを見るとあるいは境界相論の裁許絵図の写しのようなものかも知れません。

図は一見極めて大まかに画かれているように見えますが、現在の精密な地図を見た目で見ても、各村の配置が自然に感じられます。詳しく当たって見ると、明治26年測図の地図の各村の位置とよく一致しています。ただし村名は、絵図の「ガモフ(蒲生)」が地図の「新庄」に、「萬木」が「青柳」に変っているとします。東西5キロメートル余、南北4キロメートル余の広い地域を画きながら、地図的に正確に画かれていることは驚きですが、それは次のように考えられます。

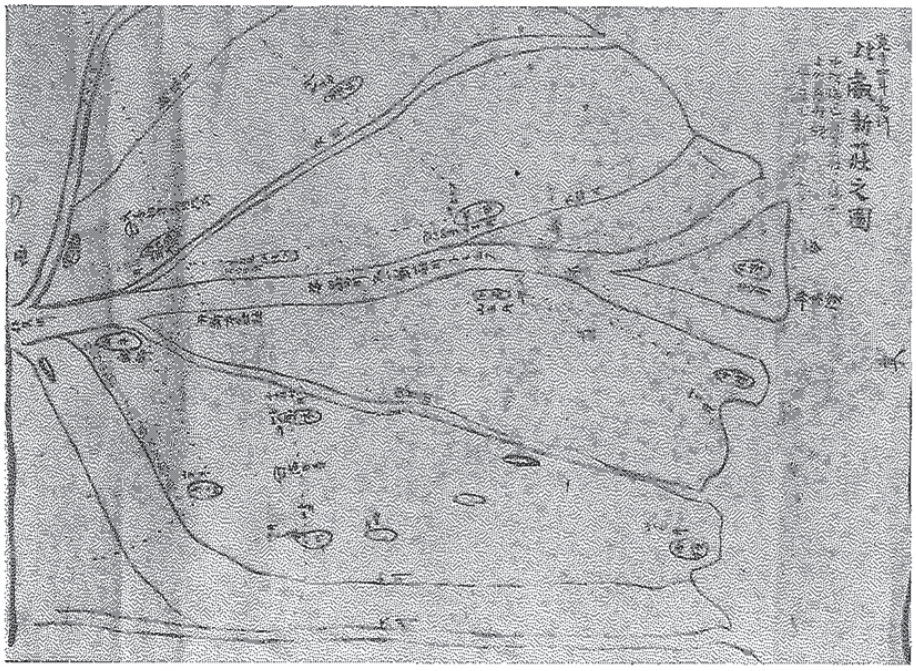

写真1　比叡新荘絵図

条里制が中国から伝えられた時、この条里制の碁盤目の地割を基礎とした「方格（方眼）図法」という絵図の画き方が伝えられたと言われています。中世の重要な荘園図や田図にはこの図法で画かれたものが多く、これらの絵図は、内容は簡単であるが地図的な精度はかなり高く、一定の縮尺をさえ持っているものが多い

のです。この絵図は、あるいはそのような絵図が下図になっているのではないかと考えると、その精度の高さが頷けますし、例えば平安時代前期頃の安曇川の分流状況などの確かな資料になると考えられます。なお、荘園の境界が主眼であったために画き落としたのかも知れませんが、湖岸地域に内湖が画かれてありません。平安時代の前期には、水位が低かったと思われることが他にもありますので、内湖はなかったのだと見ても不当な見方ではないと考えられます。

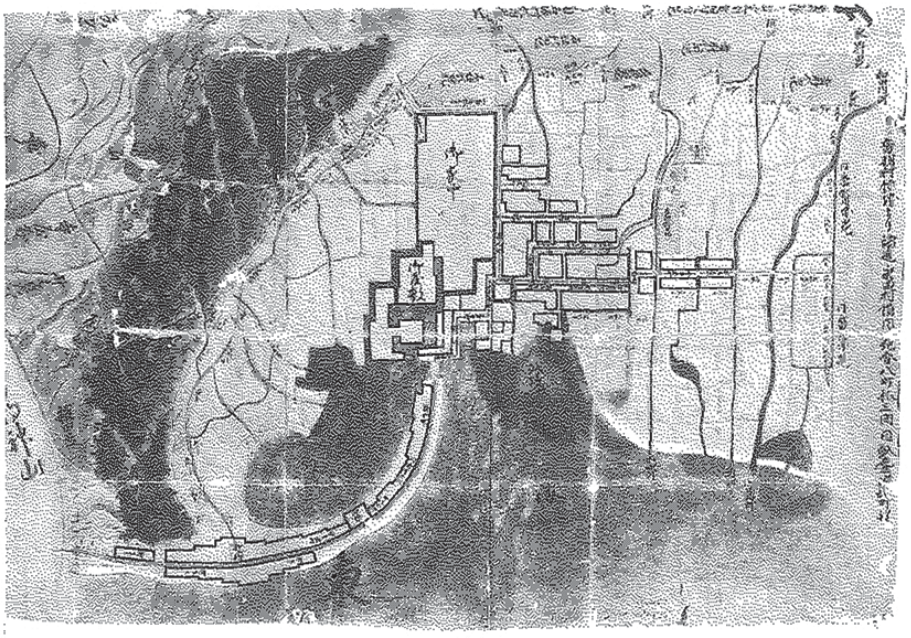

写真２　千石組絵図

２．千石組絵図　96.6cm×103.7cm

この絵図は、他の絵図の裏書きなどから、承応四(1655)年頃作られた絵図の写しであることがわかります。着色図を白黒で撮影しましたので、朱書の部分がわかりにくくなっていますが、田畑や町筋は地割りして、字名と四囲の間数を詳しく記入しています。

高島郡誌によると、千石組とは大溝村の下石垣、新町、船組、中西、福井と打下村の六ヶ村の石高千余石の地域を一郷とした呼び名であって、この絵図はその一郷と他の地域、および郷内各村々の境界を詳細に示した村絵図です。写真２はこの絵図の町筋から湖岸の部分を写したものですが、字名は今も残っており、境界や川筋の曲がりなど、その形が今もあちこちにそのまま残っています。

この地域は、後に寛文二(1662)年の大地震の際、壊滅的な打撃を受けるとともに、湖岸地域一帯が広範囲に水没すると言った劇甚な災害を受けるのですが、たまたまこの絵図はその災害を受ける前のこの地域一帯の様子を詳しく画き残しています。地図的な精度は高くありませんが、幸い地割毎にその間数が記入されているので、災変を受ける以前の状況を知るのに無くてはならない貴重な絵図であります。西近江路（旧北国道）を基準に当たって見ますと、湖岸線はほぼ現在と同じ位置で

図１　明治26年測図の地図

すが、北部の内湖は小さかったことがわかります。

3．勘兵衛、三之烝相論裁定絵図　141cm×182cm

この絵図は、貞享三年（1686）の境界相論に関係して作られ、元禄元(1688)年に裁定されたものです。写真２と同様着色した図を白黒で撮影しているためややはっきりしませんので、県立図書館所蔵のこの図の写しのスケッチを図２にあげておきました。図１の地図と比較して見てみると、地図的な精度が非常に高い絵図であることがわかります。例えばこの絵図の北国道（西近江路）上に基準となる二地点を定め、その二点が明治の地図のその二地点に合うようにこの絵図を縮小したスケッチを作って見ると、各川の位置や曲がり方がよく一致します。

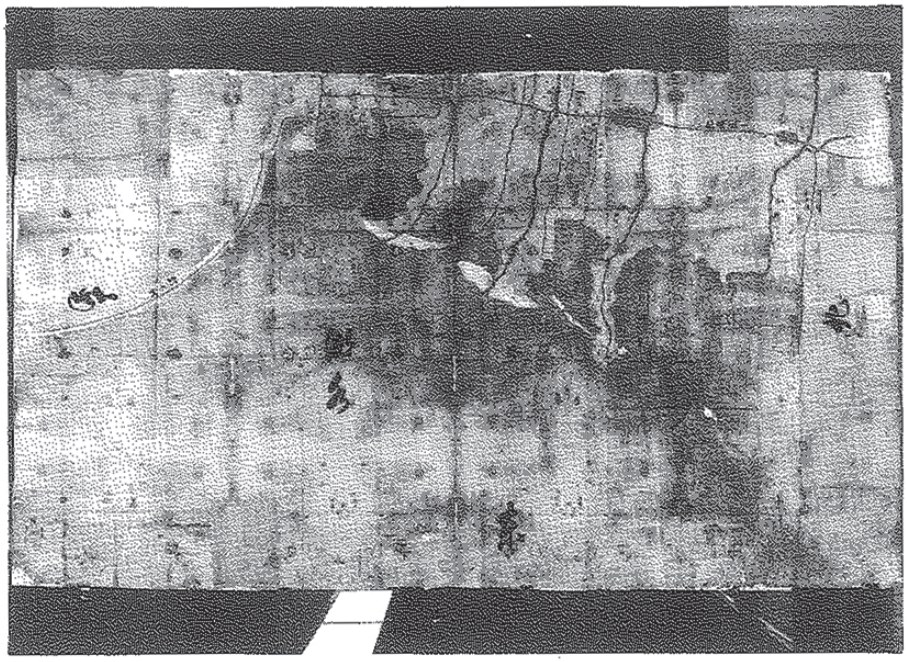

写真３　勘兵衛、三之烝相論裁定絵図

この図が作られたのは、先にあげた寛文大地震（震央が比良山東麓の琵琶湖畔で、激震地が畿内、東海、東山諸道に及ぶマグニチュード7.6の大地震で、志賀高島で田畑85町余が沈下水没したと言われています。）の23年後で、写真２の千石組絵図と較べて見ると、湖岸地域に大きな内湖が出来ていて、田地や村の境界が水没しています。この絵図の地図的な精度の高さを考え合わすと、地盤沈下による水没の貴重な資料でもあると言えます。

4．船木北浜村、南浜村、横江浜村小物成場絵図　89.8cm×154.5cm

小物成場とは、鮒場や葦刈場のように、その土地を利用して収入があげられる公有地で、その収入に対して年貢の石高が定められている場所のことです。

この絵図は、その小物成場の位置、広さ、年貢の石高、その他必要なことがいろいろ書き込まれています。着色絵図で、しかも写真が小さいために、書かれていることが読み取ってもらえませんが、太田領、北浜村（北船木）、南浜村（南船木）の湖辺と、横江浜村の内湖側の黒く出ている所が小物成場です。太田村湖岸と南

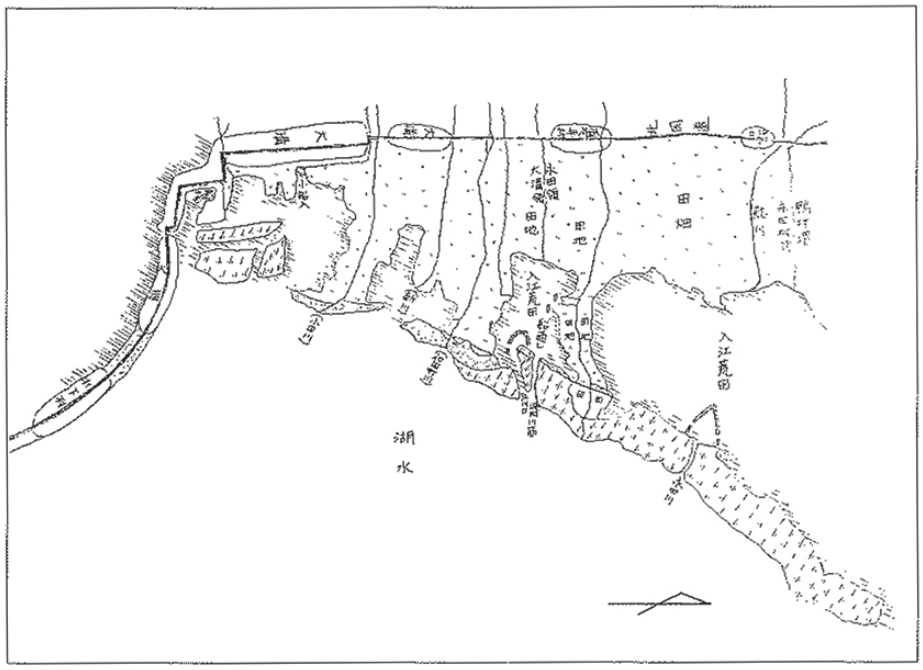

図２　勘兵衛、三之烝相論裁定絵図スケッチ

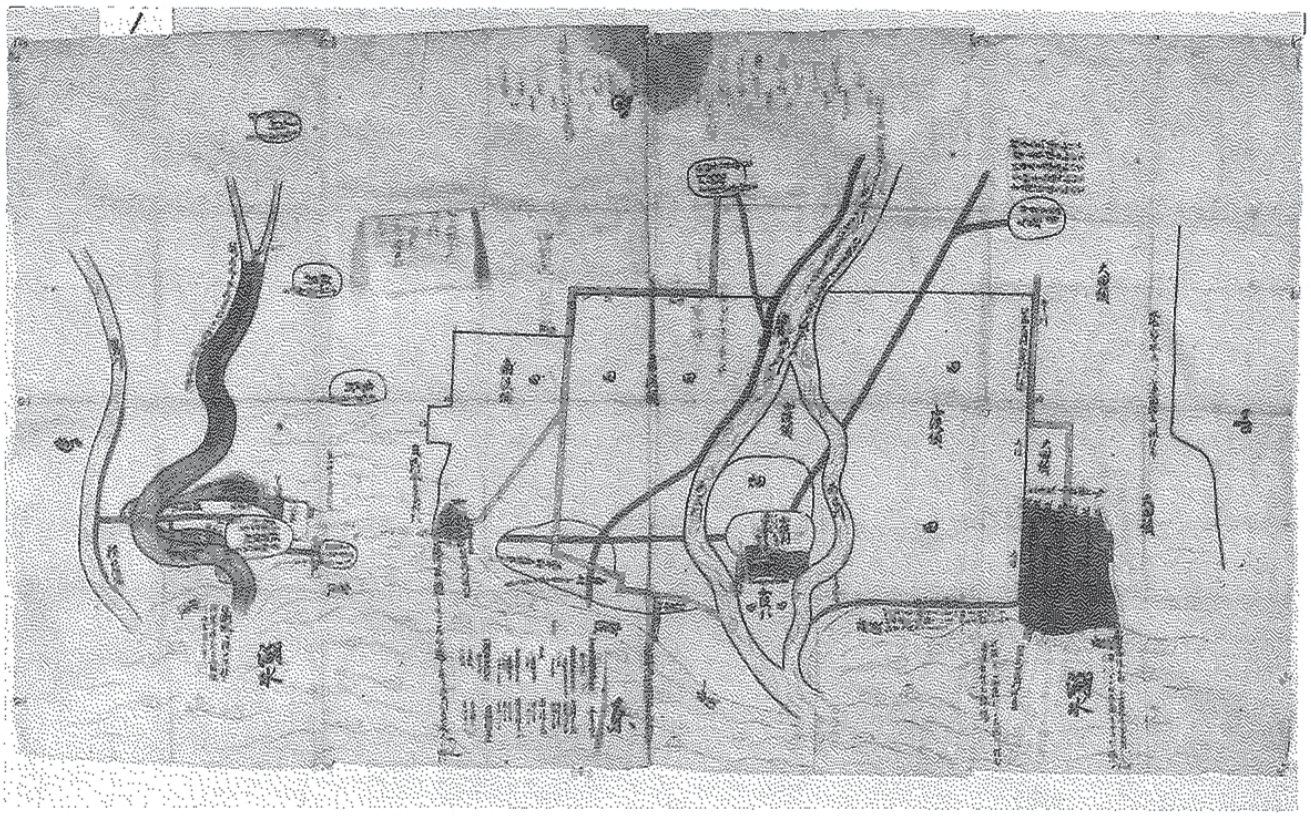

写真4　船木北浜村・南浜村・横江浜村小物成場絵図

浜村湖岸の小物成場のところに、こまかい註記がありますが、それには「以前の湖岸道や小物成場が水没して湖の中になってしまったので、道をつけかえ、小物成場の位置をこの図のように変えるが、水が引いたら、水位に従って位置をもどす。」と書かれています。この絵図は元禄三(1690)年に作られたもので、これも寛文年間の水没を示唆しています。

おわりに

琵琶湖についての自然地理学的な研究は最近急速に進展し、その著しい特徴として、湖底や湖辺が堆積によって埋められると、またそれだけ地盤が沈下したことが、確証されました。そのために数百万年もの長い年月を経ていながら湖として残って来たことがわかりました。私たちが今生活している湖岸地帯も、特に過去に内湖があったような場所は、沈下して内湖が出来、堆積でそれが埋まるとまた沈下して内湖が出来るといったことを繰返して来たと考えられます。このことは、例えば沈下の時に動いている活断層の確認など、確かめなければならないことが沢山残っていますが、先にあげた絵図や、多くの言い伝え、湖底遺跡などや、今でも内湖のことを「こうだ(荒田)」「ふけ田(消えた田)」などと呼んでいることからもうかがえます。

湖西では山と湖岸の間が狭いので、湖辺が水没したりすると、道路や港の位置が変わったことも推測されます。一方、弥生時代以後に起こった、琵琶湖の全体的な水位の上昇による水没だけで、局地的な基盤の沈下が比較的に少なかったと考えられるような地域があります。安曇川の左岸、新旭町東部がその例で、これらの地域からは弥生時代や古墳時代の多くの遺跡が湖岸地帯や湖中から発見されています。

以上のことを考え合わせると、今まで根拠が不確かなものとして見捨てられたり、軽視されたりしていた言い伝えや古絵図の中には、地形の変化の様子がうかがえるような貴重な情報が数多くあると思われ、自然地理的な変化を頭において今一度見直すことも大きな意義のあることであると思います。

(内藤　登氏 提供)